

ブカンバ先生の観光、教育、 そして変容的な 学びをめぐる軌跡



INTERVIEW
WITH

ブカンバ キモヘルマン



ブカンバ キモ ヘルマン先生

ブカンバ先生は、観光と持続可能性を専門とする教育者兼研究者です。先生の学術的な歩みは、故郷であるガボンから始まり、世界へと広がっています。その経験や、異文化に対する理解、そして誰もが学びに参加できるという「包括的な教育」への強い信念が、現在の先生の教育や研究の姿勢を形づくっています。



ブカンバ先生を知る

Q: 別府市のどんなところに魅力を感じますか??

A: 私が初めて訪れた場所の一つに、温泉地として有名な「鉄輪」があります。別府は静かで落ち着いた雰囲気になっていますが、温泉を通して自然のエネルギーを感じることができる、その対比に感動しました。温泉はただ心を癒すだけでなく、地域経済を支え、人と自然とのつながりを感じさせてくれます。「静けさと力強さが共存している」それが、別府の最大の魅力だと思います。

Q: 「持続可能性」について学ぶために、学生を世界のどこにでも連れて行けるとしたら、どこに連れていきますか?

私の故郷であるガボンに連れて行きたいです。私が1番よく知っている場所であり、自身の経験に根差した教育こそ、最も効果的だと考えます。自分の故郷の話をするすることで、難しい考え方をもっと身近でわかりやすく、学生に伝えられると思っています。

学びの旅

Q: コロナ禍を経て、人々の旅行への意識はどう変わったと思いますか？

A: パンデミックによって、人々の旅行に対する価値観は大きく変化したと思います。コロナ以前は、多くの場所を訪れることや観光客の数を増やすことが重視されていました。しかし行動が制限されたことで、「旅をする意味」そのものを考えるようになった人が増えたと思います。今では、環境への配慮や地域社会への貢献を意識する旅行者が多くなり、旅が単なる移動ではなく、より意味のある経験へと変化していると感じます。



Q: 『Sampling for All: An Inbound Approach to Travel Experience (誰もが気軽に体験できる：インバウンドから考える観光体験へのアプローチ)』を執筆したきっかけは？

A: このアイデアは、博士課程の研究論文を発表する際に行われた査読での議論から生まれました。査読者の一人が、「南アフリカでインタビューした人々の70～80%は海外旅行をしたことがない。そんな人々の意見は本当に観光研究として有効なのか？」と疑問を呈したのです。そしてその問いは私にとって、「人は海外旅行を経験していなければ、観光について語る資格がないのか？」という、より大きな問いへとつながりました。しかし、やはり私はそうは思いませんでした。



政治的・経済的・文化的な理由から、海外旅行ができない人は今も多くいます。それでも、その人たちは観光と無関係ではないのです。観光客が彼らの街に訪れて交流が生まれたり、テレビや映画を通して異文化に触れたり、観光体験は多様な形で存在しています。そういった人たちの視点も、観光体験として必要なものであるため、旅行をする人たちだけが観光について語る権利があるという考え方に疑問を投げかけようと思いました。そうした思いから、“Sampling for All (誰もが気軽に体験できる)”というタイトルにしました。ちなみに、当初は「Sustainable Sampling (持続可能な体験提供)」というタイトルも考えていました。

Q: 観光学に興味を持ったきっかけと、チュワネ工科大学での経験について教えてください。

A: 観光学に興味を持ったのは南アフリカの高校に在学していた頃です。その後、チュワネ工科大学で学士から修士課程まで観光学を専攻しました。学部時代に取り組んだ「ミニ卒論」のプロジェクトの、アンケートを作成し、回答を集めてデータを分析し、1つの物語としてまとめていく—この一連の過程が非常に楽しく、やりがいを感じました。

また、学生メンターとして調査方法論や観光マーケティング、戦略経営といった授業で他の学生をサポートしていました。そうした経験を通じて、観光だけでなく、教育や研究への関心が深まり、博士号取得や今の研究者としての道につながっています。

Q: 観光学研究科での博士課程のご研究において、特に印象的だった気づきやご苦労された点をお聞かせください。それらの経験は、先生の教育や研究にどのような影響を与えましたか？

A: 私が博士課程で直面した大きな課題は、研究手法に関する周囲とのギャップです。私は量的研究を専門とし、尺度開発や構造方程式モデリングを行っていましたが、多くの教員は質的研究を専門としていました。そのため、自分の研究手法に対して直接的な助言を得ることが難しく、孤独を感じることもありました。しかしその結果、自分の手法の正当性を論理的に主張することで、研究者としての批判的思考や粘り強さが養われたと考えます。また、私は学外の学会や研究ネットワークに

積極的に参加し、同じような方法論を扱う研究者たちと意見交換を行いました。この経験から、自分のいる環境から飛び出して、多様な視点に触れることの大切さを学びました。

これらの学びは、今の教育にも生きています。授業では、多様な視点の重要性伝え、意見の違いが生じた際にも、尊重し合い、対話し、解決策を出すように指導しています。さらに、そこで、学生は単に学位を取るために学んでいるのではなく、「学びそのものを楽しみたい」と考えていることを実感しました。そのため、私は学術的に厳密で内省的であることに加えて、学生一人ひとりが学びに対して主体的かつ個人的なつながりを感じられるような、魅力的な学びの場づくりを心がけています。

Q: 持続可能な観光を実現するための最大の課題はなんですか？

A: 最大の課題の一つは、地域住民と民間企業の利害調整だと思います。地元の人々は、文化や環境を守りたいと願っている一方で、企業は利益を追求します。ただ、企業も地域に雇用を提供しており、単純に観光を制限するだけでは問題は解決しないのです。例えば、日本では京都や二条城などでオーバーツーリズムに対する不満が地元住民から上がっています。しかし、観光地を閉鎖すれば多くの人が職を失ってしまいます。そのため、観光を止めるのではなく、すべての関係者にとって最善のバランスを見つけていく必要があるのです。

学びから 教育へ



Q: 新しく設置されたサステナビリティ観光学部（ST）で教える際に、どのような課題がありましたか？

A: 実は、STが正式に設立される前から、私はすでにAPS（アジア太平洋学部）の一部として、現在のSTに該当する分野を教えていました。ミネソタで受けたファカルティ・ディベロップメント※1のプログラムがとても印象的で、今の授業スタイルにも大きく影響していると思います。そのため、新しい科目を担当した時も、他の教員の方から資料やアドバイスをいただけたのもあり、スムーズに順応することができたのではないかと思います。このようなたくさんの方からのサポートや、研修があったおかげで、特に大きな課題は感じませんでした。

※1：大学教員の教育能力を高めるための実践的方法。大学の授業改革のための組織的な取り組み。

Q: 大規模なクラスで授業を行うとき、何を心がけていますか？

A: 授業を設計する際、まず考えるのは「シラバスに合っているか」だけではなく、「学生にとってどれだけ関心の持てる内容か」ということです。

また、多くの内容を扱った授業の後には、20問ほどの選択式クイズを作成しています。その後、ChatGPTを使って学生がタッチスクリーンで回答できる簡単なインタラクティブなウェブページを作成します。このアクティビティは、授業の最後10分や次回授業の冒頭に行うことで、楽しく授業内容の復習をすることを目的としています。これによって、能動的な学習が可能になります。そのため、受け身になりがちな大規模な講義でも非常に効果的です。



Q: 観光分野に関心を持つ学生にとって、必要なスキルとは何でしょうか？

A: まず大切なのは、「適応力」と「異文化間コミュニケーション能力」です。これは、APUが特に重視しているスキルでもあります。他にも、観光業界では、多様な背景を持つ人々と日々接することになります。そのため、異なる文化を理解し、対応できる力は非常に重要です。また、システム思考も不可欠です。学生は、観光は単なる旅行ではなく、環境・経済・政策・社会・地域住民の生活など、さまざまな要素と密接につながっていることを理解する必要があります。こうした複合的な視点を持てることが、観光業界において幅広く活躍するために必要なスキルだと思います。

Q: 学生から学んだことはありますか？

A: もちろんあります。とくにMCW（多文化協働ワークショップ）のような授業では、学生がTA（SA）として自主的に行動する機会が多くあります。TA（SA）たちの姿を見ることで、私自身の視野も広がります。彼らの創造力や自発性には、しばしば驚かされ、自分の授業を見直すきっかけをくれます。



Q: 日本以外の場所で、先生の教育方法に影響を与えたものはありますか？

A: ミネソタで参加したファカルティ・ディベロップメントでは、多くのことを学びました。特に印象に残っているのは、「教育とは、学生の注意を引きつける競争である」という考え方です。学生は授業に出ずに、家で過ごしたり、マルチカルチュラル・ウィークのイベントに行ったりすることもできます。そんな中で教室に来てくれたということは、「私の授業を選んでくれた」ということなのです。それに応えるため、私は授業を意味ある時間にしようと努めています。

私は、授業を料理に例えています。スライド、映像、色、事例、教卓、話し方、それらすべてが私の道具です。それらをどう組み合わせ、印象に残る一皿にするかが教員の腕の見せ所です。そのため、私は毎回の授業を特別な体験として、学生の記憶に残るものにしたいと考えています。

*“TEACHING IS
COMPETING FOR
STUDENTS’
ATTENTION”*



Q: APUの学生や教員に向けて、メッセージをお願いします。

A: 学生の皆さんには、最低限をこなすだけでなく、その枠を超えてもっと深く学ぶ姿勢を持ってほしいと思います。点数だけを気にするのではなく、「どうすればこの授業をもっと楽しめるか」という視点を大切にしてみてください。

そして教員の皆さんへは「体験を重視した授業」とお伝えしたいです。ルーブリックの枠にとらわれない経験や活動を提供することで、学生たちは自由に考え、動き、学ぶことができるようになります。もちろん、それは少し大変かもしれませんが、でも、その先には、学生も教員も授業の時間を楽しみに感じられる、活気ある教室が待っています。そこにこそ、本当の学びがあるのだと思います。

未来への展望

Q: 研究と教育における今後の目標はありますか？

A: まだAPUに来て3年ほどなので、今後10年でどうなりたいかという質問に答えるにはまだ少し早いかもしれません。ただ、これからゼミを担当することで、自分が学部の授業で教えてきた内容が、学生の成長としてどのように表れていくのかを、よりはっきりと観察できるようになると思います。それを通じて、どんな科目をどのように構成すれば、卒業時に必要なスキルが身につくのか、より深く考えたいと思っています。

研究面では、今後、日本とアフリカという異なる文化的文脈の比較を通じた研究に力を入れていく予定です。流行を追うのではなく、見落とされがちな地域や人々に貢献できる、意味のある研究を進めていきたいと考えています。単なる学術的貢献にとどまらず、実践や政策にも役立つ研究を目指しています。次回の論文では、観光分野における「リダイレクション・レトリック」という概念を扱っていますので、ぜひご注目ください。

インタビューの感想



名前: ピパットナーウィン パッカモン
学部: APM
出身: タイ

感想: 先生へのインタビューを通して、観光についての考え方が本当に大きく変わりました。観光業界を新たな視点から見ることができるようになりました。そして、先生のこの分野への情熱にはとても感銘を受けました。その情熱によって、私自身ももっと観光について深く学び、観光が人や地域社会に与える影響について考えていきたいと思いました。先生のお話から、意味のある旅が持つ本当の価値、そしてそれが人々や地域に与える良い影響について理解を深めることができました。

名前: グエンミントゥ
学部: APS
出身: ベトナム

感想: ブカンバ先生は、観光学だけでなく、学びにおける粘り強さや、学びを楽しむ姿勢も教えてくださいました。この貴重なインタビューの機会に、心から感謝しています。ブカンバ先生の歩みは、多くの人にとって大きな励みになると思います。この記事を読んでくださっている皆さんにも、楽しんでいただけたら幸いです。

APUで素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃいますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのか知ることが出来れば、他の先生の授業改善にも役に立ちます。そのために、インタビューをして授業の工夫を教えてください、ということで始めた取り組みです。この記事は、授業の「Quality=質」を高める、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=列」をなす、など、色々な意味を込めて[Q]と名付けました。先生方の授業の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。

Q

とは

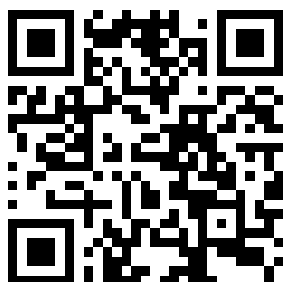
NEW

Project

PODQUEST



YouTubeでご覧いただけます



PodQuestは、Qチームが手がける新たな取り組みです。カジュアルな雰囲気の中で教授方にインタビューを行い、授業では見えてこない人となりや素顔に迫ります。普段の記事とは異なり、より親しみやすい形で、教授との新たなつながりを感じていただける内容になっています。ぜひご覧ください！